

# 初年次教育用テキスト作成の事例報告

川脇 慎也\*・天龍 洋平\*\*  
新美 尚行\*

## 1. はじめに

初年次教育は1990年代には日本の4年制高等教育機関において必要であるとの認識が持たれており、1990年代後半から2000年代初めに教育課程への組み入れが加速していった(山田(2005)<sup>1</sup>)。同時期に初年次教育に関する研究や調査、検討なども盛んに行われ(藤田(2002a, 2002b, 2006)、山田他(2005)、濱名(2008)など)、2008年には初年次教育学会が発足するなど、初年次教育への関心は高まっていった<sup>2</sup>。現在では、ほとんどの大学で初年次教育が実施されているものと推察される。

2007年9月に公表された中央教育審議会大学分科会制度・教育部会の学士課程教育の在り方に関する小委員会の審議経過報告で初めて「初年次教育」という用語が用いられた。報告の最後につけられた用語解説では、初年次教育は「高等学校から大学への円滑な移行を図り、大学での学問的・社会的な諸経験を“成功”させるべく主として大学新入生を対象に作られた総合的教育プログラム。高等学校までに習得しておくべき基礎学力の補完を目的とする補習教育とは異なり、新入生に最初に提供されることを強く意識されたもので1970

---

\* 九州国際大学

\*\*新潟県立大学

<sup>1</sup> 山田(2005)では、初年次教育ではなく導入教育や一年次教育などと表現されている。

<sup>2</sup> 初年次教育とはどのようなものかに関してはこれらの文献で詳細に説明されているので、初年次教育とはなにかについて関心がある場合はこれらの文献を参照されたい。

年代にアメリカで始められ、国際的には『First Year Experience（初年次体験）』と呼ばれている」と説明されている。

このような初年次教育の趣旨については、初年次教育を担当する多くの教員が理解しているものと考えられるが、実際に行う初年次教育の演習科目において、どう授業を組み立てるか、またどのようなテキストを用いるかということは、各大学・各学部で初年次教育を担当する教員が悩むところだと思われる。九州国際大学でも市販のテキストを使うか、独自のテキストを作成するかを検討し、最終的に独自のテキストを作成することを選択した。これは、2018年度と2019年度のことであり、初年次教育に関するテキスト作成に関わる1つの事例として本稿で紹介する。

本稿は、九州国際大学現代ビジネス学部において2018年度と2019年度に使用した初年次教育の独自テキストに関して、作成の経緯から執筆作業、授業での使用、また授業運営に至るまでの過程を説明したものである。授業内容や独自テキストを利用したことによる学生への効果について、退学率推移の分析や担当教員による考察も記述しているが、教育効果の測定や理論的な分析は行っていない。

本稿は次のように構成されている。第2節ではテキスト作成の経緯について説明する。第3節で独自テキストを作成する以前の九州国際大学の入門セミナー<sup>3</sup>の状況について説明し、第4節でテキストの作成ためにどのような準備を行ったかについて、そして第5節でテキストの作成方針について説明する。第6節では、テキスト作成の効果を簡単に議論する。そして、テキスト作成とは直接的に関係はしないが初年次教育に必要と考えられる事柄について第7節で説明し、最後にまとめと今後の展望について説明する。

---

<sup>3</sup> 初年次教育の演習科目を九州国際大学では入門セミナーという名称で開講している。後に紹介する新潟県立大学ではこの演習科目を入門演習という名称で開講している。どちらも第1節で説明された初年次教育の趣旨を汲んだ1年生向けの演習科目である。

## 2. 独自テキスト作成の経緯

九州国際大学では独自テキスト作成以前から成績不振者の割合が高く、修学規定に基づく退学勧告の対象となる学生の数も多かった。また、これらの学生の中には修学意欲をなくした者や大学での勉強についていけずに退学する者も多く、比較的高い退学率となっていた<sup>4</sup>。九州国際大学のIR (Institutional Research) 委員会が行った中退者のタイプ分析によると、1年の春学期でつまずき取得単位が極端に少ない初期型と2年生秋学期までの取得単位が少ない失速型に該当する学生の多くが4年間で卒業できなかつたり、中退する傾向にあった。

1年春学期でつまずくことから生じる成績不振や退学を食い止めることは大学全体として取り組むべき課題となっていた。この原因には高校と大学との勉強の違いに対応できず、大学での勉強について来られない学生も多いことが推測された。入門セミナーにおける受講生の人数、授業方法、内容等に関して再度点検し、新入生に高校までの勉強と大学での勉強の違いを理解してもらい、大学での学びに円滑に移ることができるようになることが、上記の問題を解決する方向性としてIR委員会から指摘された。

その問題解決の方法の一つとして、現在の学生に見合った共通教材の作成とその活用について、市販テキストの利用も含めて検討することが各学部・学科に求められた。これまでに全学共通の入門セミナーテキストやハンドブック、学部単位で授業の資料が作成されてきてはいたが、改めて検討するように要請された。そして、現代ビジネス学部地域経済学科では、当時の教務委員2名と入門セミナー幹事経験者2名が中心となって学科共通のテキスト利用を検討するようにと、当時の学部長から要請があった。そして2018年度4月に間に合うように準備することが求められた。これは2017年末のことであった。現代

---

<sup>4</sup> 退学率は表2を参照せよ。

ビジネス学部は2017年に経済学部と国際関係学部が統合してできた学部であり、地域経済学科は旧経済学部の流れを汲む学科である。これまでも何度か共通テキストの利用について検討されたようだが、地域経済学科ではもちろんのこと、旧経済学部でも採用されていないようであった<sup>5</sup>。

依頼を受けた4名は打ち合わせを行い、どのような教材を用いるか、または自分たちで作成するかを検討した。

### 3. 当時の入門セミナーの状況

共通テキストが作成される以前の旧経済学部・地域経済学科では、1年生が12、3クラスに分かれて入門セミナーⅠ・Ⅱという名前で初年次演習科目を受講した。ただし、当時は授業名こそ共通であったが、一部の行事を除いて授業内容は担当教員の裁量に任されている面が大きいものであった。一部の行事とは、全クラス（ゼミ）が参加するスポーツ大会、プレゼン大会やPROGテストといったものや、いくつかのクラスが共同で行うビブリオバトルである。

このように入門セミナーの授業内容の多くは各教員の裁量に任されていたため、共通のシラバスや共通のテキストを用いることは行われていなかった。共通テキストが作成される1年前の2017年度のシラバス作成時には、授業計画の統一は難しいので、シラバスの中での授業のねらい、達成目標、そして評価基準は共通のものにすることが話し合われたという程度であった。裁量に任される結果、教育経験の浅い若手教員を中心に、入門セミナーをどのような内容で行えば良いかよく分からず、悩んでいる者も少なからずいたようであった（筆者たちもこれらに含まれる）。

初年次教育のねらいの1つとして、まずは大学の授業に出席することが挙げられる。そのために、大学で友人や仲間を作り、大学に来たいと学生に思っ

---

<sup>5</sup> 旧経済学部については筆者たちが九州国際大学に赴任する前の状況を、当時から在籍する教員に聞いたり、当時の資料を確認したりした。

もらえる環境を作ることも行なっていた。その取り組みが、入学直後に実施しているフレッシュャーズ・ミーティング (FM) やスポーツ大会である。FM では、各ゼミに1人の上級生がステューデント・アシスタント (SA) として付き、アクティビティを通じてゼミの仲間と打ち解ける手助けを行っている。また、夜には仲間や教員とともに履修方法を理解し、履修登録の準備を行う作業も行われた。このような活動を通じて、春学期の授業が始まる前にゼミのメンバーと仲良くなり、大学生活を円滑に始められる準備を行なっている。また、ゼミ生同士の親睦を深めることなどを目的にスポーツ大会も実施されていた。

このような取り組みが一定程度の効果を挙げていたことは事実であるが、その反面で悪い効果も生み出していた。それは、大学のゼミは遊ぶことが許されている (学ばなくても良い) という理解をしている学生が一部とはいえ存在したことである。このような学生たちは、専門演習 (ゼミ) が開始される2年生になってゼミが学習をするところだと分かり、そのギャップに驚くとともにゼミの学びについていけなくなることもあったようである。このことが2年生秋学期までに取得単位数が少ない失速型の学生を生み出す一つの要因になっていたかもしれない。

#### 4. テキスト作成のための準備

2018年4月からの行われる入門セミナー I に間に合うよう、前述の4名は2017年末にテキスト選定のための準備に入った。具体的には、初年次教育に関係のありそうな書籍を数多く集め、内容を検討し、市販のテキストを利用するか、それらの内容のうちいくつかを組み合わせるか、または自分たちで独自のテキストを作成するかを決定するというものであった。テキスト選定のための検討に使用した書籍の一覧は表1にまとめられている。22冊のテキストの内容を確認し、学習内容に関して分類分けを行った。

学習内容を筆者の1人である天龍の判断で11種類に絞り、それぞれの書籍

に該当する内容が含まれているかどうかを判断した。「大学学習」は、大学での学びが高校とどのように異なっているかを説明する内容である。「講義受講」とは大学での授業の受け方やシラバスについて説明するもの、「試験」とは期末試験を中心にどのような対策を行えばよいか説明しているものとした。

「レポート」は、レポートとはどういうもので、どのように作成したら良いかを説明したものである。「ノート」は大学でのノートテイキングについて説明したものであり、「読み書き」はテキストを批判的に読んだり、論理的な文章を書く方法を説明したりする内容を含んだものである。「プレゼン」はプレゼンテーションの方法について説明したものであり、「PowerPoint」は Microsoft PowerPoint を用いたスライド作成方法について説明したものである。「論文作成」はレポートより高度なテーマを扱い、論文作成について手解きがされている内容が含まれている場合に該当する。「文献検索」は、図書館の利用方法やインターネットなどを利用して文献を検索する方法について説明がなされている内容である。「Word/Excel」は Microsoft Word や Excel に関する操作や文書作成、表計算方法の説明があるものを分類している。

ただし、同じ内容に分類分けしていたとしても、各テキストの内容は全く同じではない。例えば、レポートに関する説明にしても、複数の章にわたって詳しく説明してある書籍もあれば、章内の1節で簡単に説明されている場合もある。これらの内容の充実度に差はあれども、該当する内容が扱われているものには表に○をつけている。該当する内容がメインではないが、多少なりとも説明してあるものには△をつけている。これは例えば、プレゼンテーションの説明をする箇所、PowerPoint の使い方も簡単に紹介してある場合などが該当する。

表1における項目の分類分けをみるといくつか特徴が見られる。まず、半分以上の書籍で扱われている内容が「大学学習」「レポート」「読み書き」「プレゼン」「文献検索」であった。これらは大学生にとって基礎的な内容であるが、大学生活を行ううえで必ず必要になる知識や技能と言える。一方で、「講義受

講」「期末試験」「PowerPoint」「論文作成」「Word/Excel」といった内容は、市販されている初年次教育のテキストにはあまり採用されていないようである。この理由として考えられるのは、大学ごとの事情に因るということ、また専門的な書籍で対応できるということであろう。「講義受講」に関しては、各大学・各学部で状況は異なるであろう。入学当初から受講態度に問題がなく、あらためて講義の受講に関する心得などを説明するまでもない大学などもあるし、こういう説明が必要となる大学などもあるだろう。「期末試験」も各大学で実施内容は異なるため、市販する書籍には一般的な内容以外を記述することは難しいだろう。また、Microsoft Office である Word や Excel、PowerPoint はそれらの操作を説明してくれる専門的な書籍が販売されているし、大学では情報処理などの授業で学習する機会も多いと思われるため、初年次教育のテキストにはあまり含まれていないのだろうと推測される。

加えて、これらの初年次教育テキストはいくつかの大学の初年次ゼミなどで用いるために、その大学に所属する教員が作成した講義資料や配布資料をそのまま出版したか、それらの内容をベースに加筆・修正して出版したものが多いと思われた。

そのため、各大学の新生の事情が色濃く反映されている内容が多い傾向にあり、いずれかのテキストを入門セミナーで採用したとしても、すべての内容が九州国際大学の新生に合致することはないと考えられた。この認識は教務委員と入門セミナー幹事経験者でも共通の認識であった。市販のテキストを用いる場合、ある特定の内容では利用しようとしている大学の学生に合致する内容であるが、その他はそれほど合致しないということもある。複数のテキストを教科書や参考書として指定し、学生に購入してもらうことも考えられるが、学生の状況を考えるとあまり現実的ではないと思われる。これらの点が、市販の初年次教育テキストの利用しづらさにつながっているのではなからうか。

これらの点を考慮して、教務委員と入門セミナー幹事経験者は、「大学学習」「レポート」「ノート」「プレゼン」そして「文献検索」を入門セミナーの内容

に入れ、テキストは市販のものではなく自分たちで作成することを決定した。「読み書き」に関しては、重要なトピックであったが九州国際大学ではアカデミック・ライティング<sup>6</sup>という授業があり、その授業で学術的な文章の書き方について学習するため、入門セミナーの学習内容からは外すことにした。ただし、レポートの書き方は入門セミナーで学習するので、アカデミック・ライティングとは補完的な関係があるといえる。

## 5. テキストの作成方針はどのようなものだったか

現代ビジネス学部地域経済学科では、入門セミナーの全てのクラスで共通の内容の授業を行うことが前提であった。また、前節におけるテキスト作成の準備は2018年の1月末の会議で行ったものであり、4月の授業開始までの2ヶ月で春学期全ての内容をカバーするテキストを作成することは困難であった。そこで、2018年度は授業を実施しながらテキストを作成するという方針にした。以下では、テキストの内容に関して、シラバスに掲載する計画として記載した内容の紹介とテキストを作成する時にテキスト作成者が感じたことや注意点などを説明する。

### 5. 1. 2018年度入門セミナーの内容（シラバス）について

最初に、前年度、つまり2017年度に実施していた行事を継続するかについて、以下のように方針を定めた。FMは、授業開始前に行う行事であったため実施することにした。FMでは新入生がゼミの仲間といち早く親睦を深めて、大学生活をスムーズに始められること、また履修登録をゼミの仲間がSAにアドバイスをもらいながら行うという重要なイベントがあったため、継続するのが望ましいと判断した。

---

<sup>6</sup> 当時の授業名である。現在はカリキュラム改編に伴いアカデミックスキルという授業名に変更されている。

表1 テキスト作成のために内容を検討した書籍一覧

書籍名	大学学習	講義受講	期末試験	レポート	ノート	読み書き	プレゼン	PowerPoint	論文作成	文献検索	Word/Excel
亜細亜大学 (2015)			○				○	△			
天野他 (2008)	○			○		○	○		○	○	
井下 (2014)				○		△	○		○	△	
井下 (2017)	○			○		△					
宇田 (2012)	○	○	○	○	○						
FD 研究 (2012)	○	○	○	○	○		○			○	○
学習技術 (2015)	○			○	○	○	○	△		○	
コーンハフザー (1996)	○		○		○						
佐藤他 (2014)		○		○	△	○	△			△	
佐藤他 (2012)		△		○	○	○	○	△		○	
初年次教育 (2014)	○			○	○	○				○	
杉谷 (2011)											
世界思想社 (2014)	○		○			△	△				
世界思想社 (2015)	○		○	○	○	○	○	△		○	△
西山 (2016)									○		
日経HR (2017)	△			△	△		△			△	
松尾 (2017)	○						○				
南田他 (2017)	○			○	○	○	○	△		○	
森 (2014)	○			○	○		○			○	
吉田他 (2016)						○	○				
吉原他 (2017)	○	△	○	○	△		○			○	
渡邊他 (2014)	○			○	○		○				

スポーツ大会とビブリオバトルは例年、春学期に実施していたが、2018年度は実施しないことにした。前述したように、スポーツ大会を授業内で実施すると、大学の演習授業では遊びに近いことを行うことができると一部の学生に誤った認識を与えてしまうことが見られた。親睦を深めるためとはいえ遊びに近いイベントを授業内で全ゼミが参加する形で実施するのは止め、大学の授業は体育関連の授業以外では、きちんと学習を行うことにした。ただし、授業以外でイベントとしてスポーツ大会を実施することなどは妨げないとした。ビブリオバトルは、学外で開催されるビブリオバトルも視野に入れていくつかのゼミで春学期に実施されていた。うまくいっているゼミもあったが、一部のゼミでは発表する予定の学生が当日欠席するという事案が少なくない頻度で見られた。この原因の一つとして、高校生のとときにあまり人前で発表する機会がなく、FMで多少は仲が良くなったとはいえ大学に入学して間もない時期に人前で発表することに抵抗のある学生がいることが挙げられる。このため、もう少しゼミ内のメンバーの親睦が深まり、ゼミの雰囲気メンバーで共有される時期、特に秋学期に実施する方が欠席者も少なくなるのではないかと判断し、実施時期を変更した。

これらを踏まえ入門セミナーのシラバス案を作成し、その後、3月上旬で行った会議で次のような内容にすることに決定した。

### <2018年度入門セミナー I >

- 第1回 ガイダンス、大学生活について
- 第2回 ノートの取り方（1）：ノートの取り方に関する説明
- 第3回 ノートの取り方（2）：セミナー内の学生のノートを相互確認
- 第4回 ノートの取り方（3）：改善点を考慮した実践結果の確認
- 第5回 大学生活におけるマナー（1）：アポイントメント、オフィスパワーについて
- 第6回 大学生活におけるマナー（2）：KIU ポータルの使い方、eメールの

## 送り方

- 第7回 図書館の使い方
- 第8回 文献検索方法
- 第9回 レポートとは何か？
- 第10回 レポート作成：ワークシートによる下書き作成
- 第11回 レポートの執筆
- 第12回 レポートを完成させる
- 第13回 レポートの提出
- 第14回 アセスメンターの説明会
- 第15回 期末試験とコースの説明：試験上の注意、コース紹介など

## <2018年度入門セミナーⅡ>

- 第1回 ガイダンス：講義目標、目標と振り返りなど
- 第2回 プレゼンテーションの方法
- 第3回 個人プレゼンテーション発表スライド作成
- 第4回 個人プレゼンテーション（1）：前半
- 第5回 個人プレゼンテーション（2）：後半
- 第6回 グループワークとは何か
- 第7回 グループワーク（1）：グループで発表内容を検討
- 第8回 グループワーク（2）：中間発表までに準備することの確認
- 第9回 コースと専門演習（1）：コースと専門演習に関する説明
- 第10回 コースと専門演習（2）：コースの選択とエントリーシート
- 第11回 プレゼンテーションの中間発表
- 第12回 プレゼン大会の準備
- 第13回 プレゼン大会について
- 第14回 大会で発表されるプレゼンを審査員目線で評価
- 第15回 期末試験の説明と秋学期の振り返り

2018年度における入門セミナーの基本的な方針は、春学期は人前に出ずに個人で行うことができる内容を中心とし、秋学期に発表やグループワークを行うというものである。大学に入学したての新入生にとっては、大学での学びを行うにあたって抑えておかなければならないことは数多くある。その中でも個人で身につけておくべき、と思われるもの、入学後の早い段階で教えた方がよいものを春学期の入門セミナーⅠで扱うようにした。ただし、人前に出ずに個人でできることが中心と言っても、ノートの取り方におけるゼミ内のメンバー間でノートを見せ合うなど、ゼミのメンバーとの交流が全くないということにはなかった。FM や入門セミナーⅠでゼミのメンバーとの交流をすることによって、徐々にゼミ内の雰囲気を作り、発表するのが恥ずかしいという気持ちを少しでも抑えられ、発表を欠席することを防ぐことを意図した。このため、個人での発表やグループワークは秋学期に回した。

秋学期には、個人での発表、ゼミ内におけるグループでの発表、そして学年全体で行うプレゼン大会での発表と、徐々に発表の規模を大きくしていった。個人の発表は秋学期にすぐに行えるように、夏休みに1年生全員に活字の書籍を1冊読んでもらい、ブックレポートを作成するという課題を課した。そのブックレポートを元に、発表用のスライド作成をセミナーの授業時間で行い、各自の発表を行ってもらった。グループでの発表は1年生全体で共通のテーマを定め、テーマに沿った発表内容をグループ内の仲間と協働して考え、発表するというものだった。個人発表のためのスライド作成は、PowerPoint の使い方も学習できるような授業を行った。

評価方法も学年全体で統一した。これは同じ授業名で異なる評価になることに対して問題があると考えられたからである。また、2018年度秋学期の終盤である12月にテキストの原稿が出来上がり、簡易製本をして学生と担当教員に配布した。

2019年度は、2018年度で改善が必要とされた箇所を修正し、次のような授業構成、およびテキストの内容とした。

### <2019年度入門セミナーⅠ>

- 第1回 ガイダンス、ポータルの基礎、アセスメンター
- 第2回 KIU ポータルの使い方
- 第3回 ノートの取り方(1) : ノートの取り方に関する説明
- 第4回 大学生活におけるマナー(1) : アポイントメント、オフィスアワーについて
- 第5回 大学生活におけるマナー(2) : ファイルの扱い方、教員へのeメールの送り方
- 第6回 図書館の使い方
- 第7回 文献検索方法
- 第8回 ノートの取り方(2) : セミナー内の学生のノートを相互確認
- 第9回 Microsoft Wordの基礎: レポート作成に必要なWordスキルを身につける
- 第10回 レポート作成(1) : レポートとは何か?
- 第11回 レポート作成(2) : 下書きの作成
- 第12回 レポート作成(3) : レポートの執筆
- 第13回 レポート作成(4) : レポートを完成させる
- 第14回 レポート作成(5) : レポートの提出
- 第15回 期末試験とコースの説明: 試験上の注意、コース紹介など

### <2019年度入門セミナーⅡ>

- 第1回 ガイダンス、講義計画、目標と振り返りなど
- 第2回 プレゼンテーションの方法
- 第3回 個人プレゼンテーション発表スライド作成
- 第4回 個人プレゼンテーション(1) : 前半
- 第5回 個人プレゼンテーション(2) : 後半
- 第6回 グループワークとは何か

- 第7回 グループワーク（1）：グループで発表内容を検討
- 第8回 グループワーク（2）：中間発表までに準備することの確認
- 第9回 プレゼンテーションの中間発表
- 第10回 コースと専門演習（1）：コースと専門演習に関する説明
- 第11回 コースと専門演習（2）：コースの選択とエントリーシート
- 第12回 プレゼン大会の準備
- 第13回 入門セミナー対抗プレゼン大会
- 第14回 プレゼン大会の振り返り
- 第15回 期末試験の説明と秋学期の振り返り

基本的な構成は変えず、入門セミナーⅠで多少の変更を行った。まず、ノートの取り方の授業は3回から2回に減らし、また、1回目を行ったあとに少し時間をおいて2回目の授業を実施するように変更した。これは、2018年度に担当していた教員から「ノートの取り方を説明した後に、実践する機会があった方がよい」という意見を反映したものである。次に、減らした授業1回分に対して、特にレポート作成時に必要となるような機能を中心にしてWordの使い方を、PC教室を利用して演習する授業を取り入れた。Wordに直接表を挿入したり、Excelで作成した表を貼り付ける方法やレポート作成で用いる基本的なレイアウトを、見本を参考に作成するという内容である。最後に、大学で使用しているポータルに大幅なアップデートがあり、これまで使用していたものとはかなり機能が異なるものが登場した。そのため、ポータルの使い方について、教員はもとより学生に対して丁寧な説明が必要になると考え、春学期の早い段階で扱うことにした。

入門セミナーⅡの内容は、テキストの構成や内容はほぼ変えなかった。ただし、プレゼン大会やその運営方法など、前年度から改善する必要があった箇所は変更した。

2019年度は早い段階でテキストの改訂が行えたため、5月末には簡易製本

を完成させ、担当教員と新生に配布することができた。4月の授業開始に間に合わなかったのは、前述したポータル的大幅なアップデートが行われたのが3月から4月にかけてであり、テキスト作成者がポータルの機能を把握するのに時間を要したことが要因である。

このように2018年度から2019年度にかけて、テキストの内容や入門セミナーの内容を改良し、概ね中身が完成したと言える。

## 5. 2. テキスト作成時の注意点・気づき

ここまで、初年次教育のテキスト作成について、経緯から実際にテキストを作成し、授業を行うまでを説明した。ここでは、テキストを作成する際にテキスト作成者が気づいた点、心がけた点、また注意した方がよいと思われる点について記述していきたい。

最初に、今回のテキスト作成に関わる人数は4名とした。学科教員のうち、入門セミナーを担当する可能性のあった教員数は23名<sup>7</sup>である。このうち、毎年12、3のクラスができるため、12、3名ほどの教員が入門セミナーを担当することになる。多くの教員が関わる科目では、皆で1章か2章ずつ分担して負担を軽減し、テキストを作成するということが考えられるが、それは行わなかった。作成に関わる人数が多いと意思疎通や意見をまとめるのが大変になり、短時間でテキストを作成することが難しいと判断したためである。このため、今回のテキストは当時の教務委員2名と入門セミナー幹事経験者2名の4名で作成した。ただし、4名で30回分の内容のテキストを作成するのは負担が大きいため、工夫が必要とされた。

その工夫とは、なるべく担当するトピックが固まるように配慮をしたことである。例えば、図書館・文献検索やレポート作成、グループワークといった複数回にわたって行う授業分は特定の教員が作成するようにした。ポータルの使

---

<sup>7</sup> 現代ビジネス学部設立のために文部科学省に提出した書類に記載のあった教員のうち、地域経済学科に所属している教員の数である。

い方や大学生活におけるマナー、Wordでのレポート作成など単発的なトピックはテキスト作成の責任者であった天龍が担当した。このように分担することで、短期間のうちにテキストが出来上がったと思われる。

ただし、2018年度は特に授業を行いながらテキストを作成したこと、それぞれの教員は入門セミナーだけでなく他の授業も行っていること、そして当然、授業以外の学内業務等も並行して行っていたためかなりの業務量になった。業務量が多いため、テキストの作成が遅れてしまうこともあった。そのため、配布が遅いと苦情がくることもあった。

次に、単発的なトピックスを扱う難しさについて説明する。単発的なトピックスでは特に、PC関連環境と（授業以外の）外部環境の変化の速さによってテキスト作成にかなりの負担が生じる。PC関連では、使用するオペレーティングシステム（OS）やアプリケーション（アプリ）、インターネットサイトのバージョンや仕様変更などが毎年のように発生する。また、授業外部の環境では、学期の変更や新制度の導入、学習ポートフォリオや新しいポータルへの導入といったことが生じうる。これらのことが生じると、テキストの内容や図を変更しなければならなくなる。このような対応は、テキストを作成する担当者の負担を増加させる。レポート作成やグループワークといった内容は、急激に授業内容の変更に迫られることは多くはないが、使用するアプリの仕様が変われば対応を迫られる箇所もある。市販されている書籍のように改訂版を出すまでテキストの内容を変更しないことも考えられるが、その場合は入門セミナーを担当している教員から不満や質問がでることが予想される。全ての教員がこのようなPC関連の事情や操作に慣れていないわけではないので、対応せざるをえなくなる。また、このような単発的なトピックスの一定程度の割合でその大学独自のシステムの説明が必要であったりするので、なおさら改訂をせざるをえなくなる。

3つ目は担当教員間での情報共有についてである。地域経済学科では、月1回の頻度で入門セミナー担当者会議が開催されていた。そのため、教員に対し

て情報共有する機会に恵まれたと言える。会議の場で、今後のスケジュールや注意点を説明した。合わせて、どのように授業を進めるか、課題の用紙や提出方法といったマニュアル資料を作成しメールで担当者に送った。これに加えて、PC 関連などは必要に応じて講習会を開催した。例えば、九州国際大学ではこの時期に新しいポータルを導入したため、担当教員に対して学期開始前にポータルの操作に関して説明会を行った。

4つ目は複数のゼミが合同で行う場合の調整についてである。九州国際大学では、約250名(12,13ゼミ)が一度に利用できるPC教室がなく、分散せざるをえなかった。大きいPC教室では3ゼミが合同、中程度のPC教室では2ゼミが合同といったように、ゼミではあるが合同で授業を実施せざるをえない場合があった。このようにしても、入門セミナー実施時間に全てのゼミが受講できなかったため、時間をずらして授業をおこなったゼミもある。九州国際大学では2018年度と2019年度は火曜日の1限に入門セミナーを行っていた。加えて、学年全体で行う行事のことも考慮して火曜日の2限に地域経済学科の1年生の授業は入れないように配慮していたため、この時間を利用することが可能であった。教室が足りないことにより合同ゼミを実施したが、副産物も得られた。それは、合同ゼミの場合、複数いる教員のうち1人が前で説明を行い、残りの教員はPC操作が苦手な学生のサポートに回ることができたという点である。各ゼミに1人のSAがいたため、3ゼミ合同の場合だと2名の教員と3名のSAが1年生のサポートができた。これはPC操作説明・演習などを1ゼミ内で行うより、教育の効果は上がったのではないと思われる。

5つ目は、初年時の大変さが挙げられる。2018年度はまったくのゼロの状態から、学期中に授業を実施しながらテキストを作成したことで、テキスト作成担当教員の負担は非常に大きかった。しかし、一度テキストを作成してしまうと、次の年度以降は新たに作成する箇所はそれほど多くはない。そのため、テキスト作成自体については、2019年度は2018年度ほど大変ではなかった。ただし、合同授業のための教室調整・予約や授業運営上の連絡などは、変わら

が大変である。後者の業務の一部については、テキスト作成者以外の教職員に任せることも必要ではないと思われる。

6つ目は、テキストの分量である。初年次教育の書籍を見てみるとページ数がそれほど多くないものから、多いものまでさまざまである。これは著者や各大学の事情があると思われるが、2018年度におけるテキスト作成担当者の方針は、まずは教員に内容を十分に伝えるために詳しく書く、というものであった。教員がテキストの内容を熟知しておけば、それをわかりやすく学生に伝えてくれることを期待した。最初から内容を少なく、ページ数を少なくしてしまうと90分の授業に耐えられない可能性もあった。このため、2018年度は213ページ、2019年度は267ページの分量となった。入門セミナーを担当する教員がテキストの内容に慣れてきたら<sup>8</sup>、ページ数を少なくすることを検討していた。

最後は製本についてである。作成したテキストのファイルを大学のポータル上に掲載して、学生に印刷してもらおうということも考えられた。ただし、全ての学生がテキストを印刷してくれるとは考えづらかったため、製本を行うことを検討した。製本する場合、書籍として出版するか自主出版（簡易製本）するかが考えられたが、後者を選択した。まだ書籍として出版するには時期尚早であるし、テキストの内容も改善の余地があった。また、前述したようにテキストの内容も頻繁に修正せざるをえないことも想定されたことが理由として挙げられる。

簡易製本といっても、かなりの費用が見込まれた。そのため、どこからか印刷の経費を賄わなければならなかった。大学内でさまざまな交渉を行ったが、最終的には学部が運営している学会（現代ビジネス学会）から費用を出してもらえることになった。2018年度は200ページ強のテキストを300部印刷して約25万円ほどであった。このような費用をすぐに賄うことができる大学は問題ないが、そうでない大学や学部は経費をどう捻出するかも悩ましい問題ではな

---

<sup>8</sup> これは数年後になると想定していた。

いかと思われる。テキストを学生に購入してもらうことで印刷費用を捻出することも一つの方法ではないだろうか。

## 6. テキスト作成の結果はどうだったのか

テキスト作成と授業全体の運営に対する負担が大きかったため、テキスト作成者は2019年度で役目を終えることになった。その後の経過とテキスト作成の効果について本節で説明する。

### 6. 1. テキスト作成のその後について

まず、2020年度以降のテキスト利用状況について整理する。2020年度と2021年度は、市販のテキストである専修大学出版企画委員会編（2018）を使用した。2022年度と2023年度は2019年度オリジナルテキストをベースとして現在の学生の状況に沿った内容に改変しつつ授業を構成し、解説動画の作成をするなど工夫した。

先述のように、作成したテキストは大学における初年次教育として「大学学習」「レポート」「読み書き」「プレゼン」「文献検索」をテーマとして取り上げている。この傾向は平成23年度における文部科学省の調査でも示されており、現在に至るまで初年次教育の一般的な内容として取り入れられていると理解してよい<sup>9</sup>。

科目担当者の視点からすれば、市販テキストを用いるメリットは、授業資料作成に要するコストを削減できるところにある。デジタルテキストへの移行が進みつつある現状をふまえれば、印刷・製本にかかるコストについては、そもそも無視できるかもしれない。しかし、独自テキストの作成するために要する

---

<sup>9</sup> 文部科学省「大学における教育内容等の改革状況等について（平成23年度）3調査結果（1～4）」p. 15 ([https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/\\_icsFiles/afieldfile/2014/03/10/1341433\\_03.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/2014/03/10/1341433_03.pdf)) 令和7年2月14日参照。

時間や労力は相当なものである。したがって、市販テキストを導入して、より教育効果を期待する取り組みにそれらを振り向けるという選択は、合理的であるといえよう。初年次教育の一般的な内容については市販テキストを使用し、各大学個別の事情に応じて、適宜補足・説明をするハイブリッド方式も考えられる。九州国際大学では、2020－1年度に専修大学出版企画委員会編（2018）<sup>10</sup>を使用して、ハイブリッド方式で初年次教育を実施した。

このテキストでは、ノートの取り方、ネット・メディアリテラシー、文章の読み方、議論の仕方、レポートの書き方、プレゼンテーションの仕方が丁寧にわかりやすく説明されている。各大学固有の事情については切り離し、初年次教育における到達目標を「高校と大学との違いを一般的に解説すること」と定めるならば、本書のみで十分に対応可能であろう。2020－1年度、九州国際大学ではハイブリッド方式で初年次教育を実施したが、シラバスは大学に固有な制度やカリキュラムを前提として構成されていた。そこで重視されていたのは、一般的な内容よりも、むしろ大学に特有な事情に基づいた内容であった。

その結果、次の問題が生じていたように思われる。まず、市販テキストではカバーできない部分が多く、そのフォローについては科目担当教員各々の裁量に任されていた。そのため、教員は各々必要資料を準備する必要があった。ここでの問題は、その結果として、教員間で授業内容に差が生じていた可能性がある、ということである。九州国際大学では2年次からゼミに所属することになるが、1年次に初年次教育で学習した内容が異なる場合、ゼミ運営が煩雑にならざるを得ない。それに対して独自テキストを使用していた時は、このような問題について感じることはなかった。

独自テキストは九州国際大学の学生が大学生活を送るうえで必要な情報が網羅的に紹介され、記述の難易度も含めて最適化されていた。そのため、初年次教育を終えた段階で、すべての学生が習得できたかどうかは別として、少なく

---

<sup>10</sup> 九州国際大学では2020－1年度は市販テキストのみ、2022年度は市販・独自資料の併用、2023年度は独自資料のみで初年次教育を実施している。

とも1度は同様の水準で、同一内容を学んでいるという前提に立てる。さらに、2年次以降に振り返りの教材として、また何かわからないことがあれば辞書的に活用できたことも、独自テキストの大きなメリットであった。

## 6. 2. テキスト作成・利用の効果について

入門セミナーは1年生時に受講する授業であるが、卒業要件として必要となる修得単位数124単位のうちの4単位を占めるに過ぎない。そのため、入門セミナーで独自テキストを利用することが学生の退学に対し大きな影響を持つかといえば疑問符がつく。また、入門セミナー以外の授業やゼミ担当教員の指導、その他の要因が学生の退学率に影響を与えることは容易に考えられるため、入門セミナー単独の学生に対する影響を測定することは難しい。そこで、本節では、入門セミナーで共通の独自テキストを利用したことによって退学率が増えたかどうか注目する。

現代ビジネス学部設置後の退学に関する状況について、2017年度から2022年度入学生のその詳細について確認<sup>11</sup>をする。2017年から2022年の退学率は表2の通りである。2018年度から2020年度にかけて退学率<sup>12</sup>は低下傾向にあったが、2021年より再び増加傾向に転じている。

退学者が退学をするタイミングについて、月別に集計したところ、学期終了時のタイミング(10月・3月)が多い傾向を示し、特に、退学率が4.0%を上回っていた2018年度(4.87%)、2021年度(4.38%)においては1年春学期終了時(10月まで)での退学者が多い傾向(2018年度:84.61%、2021年度:74.99%)が示され、次いで退学率が高かった2017年度(3.94%)においても、同様の傾向(2017年度69.23%)が確認された。退学率の高い年度は、より早期の退学判断がされる傾向が示された(表3)。

退学をした理由を集計したところ、いずれの年度においても「進路変更」が

<sup>11</sup> 学務事務室が提供するデータから個人の特定につながる情報は排除し利用した。

<sup>12</sup> 入学年度(初年次)における退学者数・退学率を計算した。

表2 地域経済学科学生の退学率

入学年度	学科入学者数	退学者数	初年次退学率(%)
2017	330	13	3.94
2018	267	13	4.87
2019	286	9	3.15
2020	283	7	2.47
2021	274	12	4.38
2022	265	9	3.40

表3 退学のタイミング

入学年度	退学月 n(%)												
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
2017						1(7.69)	8(61.54)					4(30.77)	
2018	1(7.69)			1(7.69)		3(23.08)	6(46.15)	2(15.38)					
2019		1(11.11)				1(11.11)	3(33.33)		1(11.11)			3(33.33)	
2020							3(42.86)					4(57.14)	
2021			1(8.33)	1(8.33)		3(25.00)	4(33.33)					3(25.00)	
2022				1(11.11)		1(11.11)	2(22.22)					5(55.56)	

最も多い理由であった(表4)。最終的な手続き上の理由には「進路変更」と示されているが、その理由について詳細を確認すると、進路変更に至るまでの理由は様々であり、学業不振や、人間関係に関する事、部活動に関する事など多岐にわたっている。そこで、退学理由すべての詳細を確認し、「勉強についていけない」「修得単位が少ない」「学業不振」といった独自テキストの内容が貢献し得る勉強意欲や修得単位に関する理由(以下、学業関連と記す)に着目して、それらの理由が退学理由に記載されている学生を抽出し、学業関連が間接的にも退学理由となっている者と退学者全体に占める割合は、2017年度は3名(23.08%)、2018年度は4名(30.77%)、2019年度は1名(11.11%)、2020年度は1名(14.29%)、2021年度は3名(25.00%)、2022年度は2名(22.22%)であった。

2018年度より取り組んだテキスト内容の共通化だが、この取り組みの初年度の学業関連による退学者の割合(30.77%)は比較した6年間で最も高い割

表4 退学の理由

入学年度	退学理由								
	進学	就職	進路 変更	意欲 喪失	学業 不振	家庭 の事情	健康上 の理由	経済的 理由	その他
2017			7	3			1	1	1
2018			8	1	1		1		2
2019			6	1			2		
2020			3	1	1		1	1	
2021			7	1			3	1	
2022			5		2		2	1	

合を示した一方、2019年度にはその割足は最も低い割合（11.11%）を示し、2020年度においても14.29%と次いで低い割合を示している。このことから、共通化による退学率の悪化は避けられたと推察される。

### 6. 3. オリジナルテキストの内容に汎用性はあるか

九州国際大学でオリジナルテキストを作成した経緯はすでに説明した。ここでは、市販のテキストを全面的に使用することはできないということが大きな理由であった。では、九州国際大学で使用したテキストの内容は他大学で利用可能なのだろうか。ここでは、筆者の一人である天龍が実施した事例について簡単に紹介する。

新潟県立大学で天龍が2022年度に初年次教育を担当したとき、ほぼ同内容の授業を実施した<sup>13</sup>。しかし、教員が説明するまでもなく学生ができていた箇所などあり、うまくいかない箇所があった。そこで2023年度は、前年度の反省を踏まえ内容の修正を行った。特に、ノートを取り方に関してはほとんどの学生ができていたので確認程度にし、レポート作成に関する内容を多くした。特に、引用のルールや参考文献の書き方など、レポート作成に関してより細か

<sup>13</sup> ただし、新潟県立大学国際経済学部においても初年次教育の前期は特に内容を統一していたため、九州国際大学現代ビジネス学部で実施していたものとは異なる内容の授業を行うことも当然ながらあった。その場合には新たに授業内容を準備したため、単純に比較はできない。

いところまで説明した。ただし、授業全体のレベルはほとんど変えてはいない。

初年次教育の内容について効果測定を行うことは難しいが、授業評価アンケートの結果を見ることでその参考とする。新潟県立大学で2022年度・2023年度前期に実施した授業評価アンケートの結果を見ると、「この授業の難易度は適切だった」と「この授業に満足できた」という項目は全員がそう思うという評価をしていた<sup>14</sup>。内容の多少の変更はあったとはいえ、初年次教育の内容に関して一定程度の評価が得られたものと言えるだろう。したがって、トピックスとしての内容についてはある程度、どの大学で行っても新入生にとっては有益だといえるだろう。

ただし、独自のテキストを作成したとしても、これをそのまま他大学・他学部で利用することは難しいと考えられる。ここでは1つの例しか挙げていないが、初年次教育向けの市販テキストも併せて考えると、初年次教育の内容は各大学・各学部の学生の事情に合わせて内容を微調整する必要があると思われる。また、それぞれの大学の制度やルール、そして使用している学内システムが全く同じということも考えにくいいため、それらに対応した内容に変更する必要がある。これは、九州国際大学で独自テキストを作成するに至った理由と同じである。

## 7. 共通のテキスト以外に必要なことはあるか

ここでは、初年次教育の内容を共通化し、独自テキストを作成すること以外に必要と思われることを1つ指摘しておきたい。それは、新入生が大学生活に馴染むための工夫である。

新潟県立大学で2022年度に天龍が実施した初年次教育では、九州国際大学で行った2019年度の内容とほぼ同じだった。授業内容そのものの満足度は高

---

<sup>14</sup> 入門演習の履修者は1クラス15名程度である。また、2022年度前期の回答率は11.8%、2023年度は81.3%であった。

かったが、「ゼミ生同士が仲良くなるような機会が前期にあればよかった」というコメントがあった。入門演習以外に新入生同士が知り合い、仲良くなるイベントなどは実施されてはいるが、同じ入門ゼミのメンバーとコミュニケーションをとる機会が早い段階であるとよいと、新入生は感じていたようである。

九州国際大学では、新学期の授業が始まる前にFMを行い、入門セミナーのクラス単位で行動することで親睦を深めている。しかし、2020年の新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、FMは中止となった。感染症拡大防止という観点から授業運営の方法に変更が求められるなど、大きく環境が変わったため、特に人間関係構築創出の場を提供することは、工夫が必要になった。このような影響はあったものの、九州国際大学でも、学業を含め、大学生生活の適切な援助を得るための仲間づくりのためにもFMのようなイベントは必要だと認識されている。

一方で、入学当初のまだ事情が詳しくわからない時期に親睦の場を設けることに注意すべき点もある。それは2020年度入学生の一部からはFMが中止になったことで、悪い方に足を引っ張られず、学業などにとって自分に良い影響を与えてくれるような友達の見極めができたとの声も聞かれた。

濱名(2008)が指摘するように、初年次教育にはフォーマルなカリキュラムに含まれない友人関係などの経験からの学びも含まれている。したがって、入門セミナー内外でクラスの仲間との関係を構築する手助けをすることは、大学に求められることだと理解できよう。

## 8. おわりに

本稿は、九州国際大学現代ビジネス学部で作成したオリジナルの初年次教育用のテキストに関する事例報告であった。作成の経緯から、どのような内容で誰が作成するかについて詳細に報告した。また、テキスト作成後の効果について簡単にはあるが考察を加えている。

独自テキストを用いることの最も大きな利点は、自分の所属する大学・学部  
のニーズにあった授業内容を提供できるという点である。市販のテキストを用  
いた場合に発生する自分の大学・学部にあった内容に差し替えるという作業は  
なくなる。授業の内容を1冊のテキストに収めることができ、それらの難易度  
を調整することや新しい事象に対してすぐに対応することができるという自由  
度の高さも利点として挙げられる。また、2年生以上になって入門セミナーを  
担当した教員とは別の教員が専門演習を担当したとしても、容易に振り返りが  
できる。

ただし、テキスト作成には非常に大きな負担が生じるため、テキスト作成の  
支援や配慮、適切なチームづくりなどが必要となる。加えて、初年次教育の演  
習は通常多くの教員が同時に担当することが予想されるため、事前の情報共有  
や事後のフィードバックなど演習全体の円滑な運営を行うための労力も大きく  
なる点には注意が必要だろう。

最後に、本稿ではオリジナルテキストの作成や授業内容の共通化に対する教  
育効果の測定や理論的な分析は十分には行っていないため、今後このような  
分析を行うことが必要となる。また、現在でも大学紀要などを中心に、多く  
の事例報告がなされている。このような事例報告をまとめて現在の初年次教育  
の状況について整理することは重要だと思われる。他にも、各大学のシラバス  
分析を行い、偏差値を目安としてどの偏差値帯の大学でどのレベルの内容が必  
要かなど、共通する課題が得られるかを検討することも有益かもしれない。

## 参考文献

- 亜細亜大学経営学部編. (2015), 『インタビュー実践！：レポート・プレゼン・就  
業力』, 翰林書房.
- 天野明弘, 太田勲, 野津隆志. (2008), 『スタディ・スキルズ：大学でしっかりと  
学ぶために』, 有斐閣ブックス.
- 井下千以子. (2014), 『思考を鍛えるレポート・論文作成法第2版』, 慶應義塾大学

- 出版会。
- 井下千以子。(2017),『思考を鍛える大学の学び入門：論理的な考え方・書き方からキャリアデザインまで』,慶應義塾大学出版会。
- 宇田光。(2012),『大学生活を楽しむ護心術：初年次教育ガイドブック』,ナカニシヤ出版。
- FD 研究プロジェクト編。『大学生の教科書：初年次からのスタディ・スキル』,丸善出版。
- 学習技術研究会編著。(2015),『知へのステップ：大学生からのスタディ・スキルズ』,くろしお出版。
- コーンハウザー著,エナーソン改訂,山口栄一訳。(1995),『大学で勉強する方法』,玉川大学出版部。
- 佐藤智明,矢島彰,山本明志編。(2014),『3訂大学学びのことはじめ：初年次セミナーワークブック』,ナカニシヤ出版。
- 佐藤望編著,湯川武,横山千晶,近藤明彦。(2012),『アカデミック・スキルズ：大学生のための知的技法入門第2版』,慶應義塾大学出版会。
- 初年次教育テキスト編集委員会編。(2014),『フレッシュマンセミナーテキスト第2版』,東京電機大学出版局。
- 杉谷祐美子編集。(2011),『大学の学び：教育内容と方法』,玉川大学出版部。
- 世界思想社編集部編。(2014),『大学新入生ハンドブック』,世界思想社。
- 世界思想社編集部編。(2015),『大学生学びのハンドブック3訂版』,世界思想社。
- 専修大学出版企画委員会編。(2018),『新・知のツールボックス—新入生のための学び方サポートブック』,専修大学出版局。
- 西山敏樹。(2016),『大学1年生からの研究の始めかた』,慶應義塾大学出版会。
- 日経 HR 編集部編著。(2017),『大学1,2年生のあいだにやっておきたいこと学就BOOK改訂第4版』,日経 HR。
- 濱名篤。(2008),「初年次教育の必要性と可能性」,『大学と学生』,5月号,6-15,独立行政法人日本学生支援機構。
- 藤田哲也。(2002a),「京都光華女子大学における導入教育：「大学基礎講座」」,『京都大学高等教育研究』,第8号,131-147。
- 藤田哲也。(2002b),「大学基礎講座の授業運営に関する検討」,『京都光華女子大学研究紀要』,40号,39-64。
- 藤田哲也。(2006),「初年次教育の目的と実際」,『リメディアル教育研究』1巻1号,1-9。
- 松尾智晶監修,中沢正江,松尾智晶著。(2017),『自己発見と大学生活：初年次教養教育のためのワークブック』,ナカニシヤ出版。

- 南田勝也, 矢田部圭介, 山下玲子. (2017), 『ゼミで学ぶスタディスキル第3版』, 北樹出版.
- 森靖雄. (2014), 『大学生の学習テクニック第3版』, 大月書店.
- 山田礼子, 沖清豪, 森利枝, 杉谷祐美子. (2005), 「私立大学における一年次教育の実際」, 『私学高等教育研究叢書』, 4.
- 山田礼子. (2005), 『一年次(導入)教育の日米比較』, 東信堂.
- 吉田重和, 古阪肇, 鴨川明子編, 森下稔監修. (2016), 『体育・スポーツ系学生のための日本語表現法: 学士力の基礎をつくる初年次教育』, 東信堂.
- 吉原恵子, 間瀬泰尚, 富江英俊, 小針誠. (2017), 『スタディスキルズ・トレーニング改訂版: 大学で学ぶための25のスキル』, 実教出版.
- 渡邊修士, 川出真清編. (2014), 『大学と経済学部の学びの技法』, 新世社.